

## 植調協会だより

### ◎ 会議開催日程のお知らせ

・平成17年度冬作関係(麦類・いぐさ・水稻刈跡)除草剤・生育調節剤試験成績中央検討会

日時：平成18年9月12日(火) 10:00~17:00

場所：東京ガーデンパレス

〒113-0034

東京都文京区湯島1-7-5

TEL 03-3813-6211

### 編集後記

今号の「植調の試験地だより」鹿児島第2試験地・高田仁氏の「遠き日の思い出」田の草取りについて如何に過酷な労働であったかを記している。「田の草取り」が如何に過酷なものであったかを書いたものに作家森絹枝さんが戦時中の女子学生の勤労奉仕で一番辛く悲しかったのは「田の草取り」だったと次のように綴っている「煮え湯のような熱い泥んこの水田に足をふみ入れて、イネの株間や株際にはえている草を手で掻きむしる。蛙が足に吸いついて鮮血が流れる気味の悪さ、灼熱の真夏の太陽に照らされて汗は額に吹き出し両目にしみるが両手は泥だらけでふくこともできない。腰をかがめて這うので顔はうっ血して腫れあがる。手や足、首など皮膚の



▲ 3 番除草・(昭和34年山形県)



▲ 1 番除草・(昭和33年新潟県)

弱いところはイネにこすれて傷になりそこに汗がしみみて痛い。どうにもならない。もう死ぬ思いだった。」(草取りをなくした男の物語より)この過酷な除草作業は一番除草から3番除草、ときに4番除草までと夏の間に3~4回やらなければならないので、6月~7月の夏の間はほぼ毎日田の草取りをしなければならなかった。春の田植え、夏の3~4回の除草作業、そして秋の苧り取りといずれも腰をかがめた作業である。昔の農業は春から秋まで腰をかがめた農作業の連続であった。従って農村の婦人は50~60歳代になると腰が曲がってしまった。除草剤の進歩とともにこうした姿は見られなくなったが農業の歴史の一駒として後世に残しておきたいと思い手取り除草風景の写真を掲載した。 ◎

財団法人 日本植物調節剤研究協会  
東京都台東区台東1丁目26番6号  
電話 (03)3832-4188 (代)  
FAX (03)3833-1807  
<http://www.japr.or.jp/>

編集人 日本植物調節剤研究協会 会長 小林 仁  
発行人 植調編集印刷事務所 広田 伸七

東京都台東区台東1-26-6 全国農村教育協会  
植調編集印刷事務所  
電話 (03)3833-1821 (代)  
FAX (03)3833-1665  
E-mail: hon@zennokyo.co.jp

平成18年8月発行 定価525円(本体500円+消費税25円)  
植調第40巻第5号 (送料 270円)

印刷所 新成印刷(株)